終わりなき歴史と繰り返される過ち。

水上羚（みなかみれい）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終わりなき歴史と繰り返される過ち。

【Ｎコード】
Ｎ２８６５Ｎ

【作者名】
水上羚（みなかみれい）

【あらすじ】
そこは、ゲーム本編の地方とはかけ離れた地方。
楕円形に近い大陸に山脈で東西に分割されている。
一方には人間とゲーム本編に登場するようなポケモンたちが現代的な生活をおくる中で、もう一方では二次創作に登場する擬人化ポケモン、
通称人型がスローライフを営む。これはそんな物語の一つ。

はじまり（前書き）

擬人化ものです。人間メインの話はまだでません。

はじまり

この物語は擬人化注意です。

序章　全ての始まりそして平穏の終わり

熱い、周りが赤い、紅い、あかい、アカイ。

辺りが火で、血でなにもかもが塗り替えられていた。

ボクはどうしてこうなったかはわからない。

ただ逃げる事を優先した。

ボクが、逃げようとして転びガレキに飲み込まれたとき

「ああ、もうすぐ死ぬのだと覚悟した」

そこで、ボクは意識をうしなった。

これより、新たな物語が綴られる。

漆黒のインクで綴られるのか、鮮血の紅で綴られるのか。

それはまだ、わからない。

はじまり（後書き）

質問、感想等を受け付けています。
辛口批評はお控えください。

あれだよね、チートってある意味の贔屓だよね

ヒョォォー

今はただ冷たい風が通り過ぎるだけ。そこは村だった所。

一夜にして子供の学び舎だった所が、人々の憩いの場だった所が、

ガレキの山と焦げ臭いにおいとひとやポケモンだったモノが、

転がっているだけだった。

「ヒドイ、ここまで壊されているなんて・・・・・・こんなんじゃあ誰も生き残ってないかもね」

「まったく。ほとんどのものが原型を残してないわよ」

「ええ、これでは望みは薄いどころか皆無ですね」

三人は焦土となり、惨劇がおこされた土地に到着した。

そして、物語の幕開けとなった。

狂気と憎悪の踊りを操り人形は踊る、糸が切れるまで・・・・・・・・・

少女が目を覚まして辺りを見渡そうとすると可愛らしい十代半ばの

女の子と目があった。

恐らく彼女はラルトスだろう。

ラルトスの少女が後ろにいる二人の少女に呼びかける。

「マリア、ベアトリーチェ、目が覚めたわ。なかなかかわいい娘ね」

すると、近くで野宿中で寝ていた淡いクリーム色に先端だけがオレンジ色のポニーテールの女の子と水

色の髪を高い位置でシニョンにしていて白いストールをはおった女の子が、

近寄ってきて私は驚いて少し後ずさりした。

「ほんとー、かわいい～ぎゅ～ってしたぁい」

いきなりシニョンの娘が、抱きついてきてどうしたらいいのかわからなくなった。

「こら、ベアト。やめなさい。困るでしょ。ソーウィルは無視しない！」

ポニーテールの娘がシニョンの娘を私からベリっと引きはがした。

「単刀直入に言うよ。何があったの？くわしく教えて」

ボクは閉ざしていた口を、自分が知る限りのことを彼女らに話した。

話していると、少し気持ちが落ち着いた

三人は静かに耳を傾けていた。

「・・・・なるほど。何も知らないんだぁ～」

相づちをうっているのはチルタリスの人型ベアトリーチェ。

「帰りに何事かと思って駆けつけると焼け野原。ここも物騒になってきたわ。はやく報告しなくちゃ」

いそいそと寝袋等を片付けつつ、

はなしているのはボクをガレキから助けてくれたキュウコンの人型マリア。

「あなたのケガ、治るのにのに時間かかるかもしれないわね。

しばらくは、私たちと同行してもらう事になるわね」

ボクの頭をやさしくなでてくれるのは、ラルトス人型のソーウィル。

彼女はガレキでケガをしているところを治療してくれた。

とてもうれしかったのをおぼえている。

でも、これが歴史の変わるきっかけだったとは・・・・・・

腐女子は一人が見つかると三人は必ずいる

ボクを入れた四人は森の中をずんずん進んで行く。歩いて行くと息苦しく、

所々急な斜面を登って行くところから、山を登って行くようだ。

ふと、気配が生じ、マリアとベアト（ベアトリーチェの愛称）とソーウィルは私を中心に円陣を組む。

「誰なの？！名を名乗りなさい！」

ソーウィルが脅すように言う。

右にある大きな木の陰からヨーギラスの人型と思われる少年が現れる。

「オレはヨーギラスのカーネリアン。

上からの命令で真ん中にいるチビをつれてこいって言われていてな、問答無用で連れて行くぜ！」

「ぜ！」と言い終わるか追わないうちに飛び上がり、カーネリアンは技を繰り出す。

“いわなだれ”！

どこからともなく岩が降り注ぐ。ソーウィルは後ろに、ベアトは前

によけた。

ボクはマリアに抱えられて左に岩をよける。

“めざめるパワー”！（格闘）

マリアがボクを抱えたまま、前から空いている左手で技をだす。

が、少しかすっただけで終わった。

“マジカルリーフ”

続いて、カーネリアンの背後からソーウィルが奇襲をしかける。

これはクリーンヒットし、カーネリアンは地面に叩き付けられる。

斜め右からベアトが“竜の波動”をだしてカーネリアンを牽制する。

「ぐあぁっ。畜生。こんなの聞いてないぜ。ガキ一人連れて来るだけって聞いてたのにょぅ」

カーネリアンが退却しようとし、踵（きびす）を返したとき、

カーネリアンの背後にテレポートで誰かが現れる。

「・・・・・・・・・・カーネリアン。今回は分が悪い。

それに、今はそういうときじゃない。退くよ」

よく通る若い男の声がした。おそらくは、カーネリアンの味方だろう。

そこですかさず、カーネリアンが反論する。

「いいじゃねぇかよ！オレはまだやれる！」

「・・・・・・・・ボロボロのクセに。帰るよ」

「もう一度言っておくがオレはノワール団のカーネリアン。Cランクだ」

「・・・・・・・・・・ボクはサーナイトのアトス。ノワール団Bランク」

アトスが静かに言い放つ。

“テレポート”

一瞬で二人が消える。残された四人にはまだこの出会いが、世界を巻き込む事件になるとは思いもしなかった。

黙々と夜の帳が落ちつつある空から逃げるように歩き続ける。

「ノワール団。・・・・・・・此処数年、悪行が目立つ集団ですね。ボスに報告しなければなりませんね」

ソーウィルが独り言のようにつぶやく。

「なぜ、狙ったのかのかは不明だしぃ～。
なんか大事になったら・・・・・なんかえらいことになりそう」
ベアトが相づちを打つ。少し歩くと、ゆらゆらゆれる明かりをみつけた。
かわいらしい、へろっとした大きめの声が聞こえた。
声のした方を見ると、手を振っているのが見えた。
「みぃ～んなぁ～。おかえりぃ～」
ベアト、マリア、ソーウィルが一斉に叫ぶ。
「ただいまー！」
そして、駆け出した。
灯りを持つ、見覚えのあるあの人の許に。
先頭で四人を引率するのはマリアたちが所属する組織、
「永久機関」（えいきゅうきかん）のトップで
ボスや親方様とか呼ばれるプクリンの人型。
言っておくが男である。ちなみに２５歳、妻子持ち。

本名がコンプレックスなので、家族以外が呼ぶとシャドーボールとかが飛んできます。

（天の声からの情報）

女の子っぽいので女装しなくても女で通るときがほとんど。

しばらくは、足音と息づかいのみが聞こえる静寂の中、暗闇とも言える洞窟内を進んで行く。

それが永遠に続くかと思われたが、

洞窟が終わり月明かりと星明かりでランプがさほど必要でなくなると、

親方はランプの火を消した。

それから親方は、一軒家くらいの大きな岩に近づくとちいさなドアに手をかけた。

ただの破滅願望者

親方は全員が建物に入った事を確認すると、パタンとドアを閉ざした。

「ふう、夜って何か怖いよね。オバケがでるかって思っちゃったもん」

親方の言い方は可愛いが、良い年した成人男性が言う言葉ではない。

（天の声より

このとき、三人は心の中で「子供かっつーの」という突っ込みをした。

口に出せば、シャドーボールが飛んで来るのがわかっているので言えなかった。

「ふふふ、いるかもしれませんよ。案外、すぐそばにね・・・・・・・・・」

口調は貴婦人を思わせるが、声のトーンは少女のセリフが背後でささいた。

「ぎゃあぁ～」3人が一斉に叫んで後ずさりし、壁に張り付く。

「あらあら、怖がらせてしまいましたか。すみません。ケガはありませんか？」

親方が苦笑しつつ、立ち上がる。

「もう、驚かせないでよぉ～。怖かったぁ。・・・・・・・・ただいま、サーシャ」

サーシャと呼ばれる少女が微笑む。

「おかえりなさい。ボス」

サーシャ、親方、マリア、ベアト、ソーウィル、

主人公はアジトの地下深くに掘り下げられたいくつもの部屋のうち、会議室とプレートがかけられた部屋に入った。

そこで、サーシャは全員が席に着いたのを確認すると話しだした。

「最近、ノワール団と称する集団の行動が目立ちますがどういたしましょうか？」

親方がうなずいてからこう答えた。

「うん、取り敢えずやつらの目的を確かめてから潰すなりする。現段階は監視が妥当かな」

「ええ、もし世界征服とかでしたり、世界の理を曲げるようなもの

であれば、

手を打たなくてはなりません。それに、人間と人型の戦争は今は休戦状態なので、

いつまた始まるかわかりません。そちらも心配です」

「二つの事が同時に起これば対処できないからね。地道にやっていこう」

突然、ソーウィルが二人の話に水をさす。

「あの～、司令長官、ボス。この娘、どうしましょう？」

親方があっけらかんと笑い飛ばす。

「あはは、そんなこと心配しいてたの？大丈夫、親が見つかるまであずかるよ」

「ふふふ、にぎやかになりそうですわ」

ちょこっと解説。

こんにちはー！機関のトップの親方がこの世界観や世界情勢についてレクチャーするよ！

地図
まず、地理から。この世界は、
楕円形に近い大陸に大小さまざまな島がくっついてるみたいに見えるんだ。
その大陸は真ん中に山脈で東西に分断されていて、東側に人間が、西側には人型が住んでるの。
原型は、どっちにも生息しているよ。

戦争について
十年前に始まって二年前に休戦状態になった人間と人型との戦争。
俗に「紅の戦」（くれないのいくさ）とか呼ばれている。
実は、この戦争が機関をつくるキッカケになった。
以前から仲が悪かったのに、あの事件のせいで戦争になっちゃった・・・・・・・
昔は東と西にまんべんなく住んでたのに今は山脈を隔てて住む事で休戦状態に落ち着いた。

機関について
略して機関とか言っちゃってるけど正式名称は「永久機関（えいきゅうきかん）」。
実体は警察とか探偵とかをごっちゃにした組織かな。なんでもやみたいな部分もあるけど。
最初は小さなボランティアから始まったの。
そのときは、七人の小さい集団で、ただ集まって、騒いで、いたずらとかばっかりしてたなぁ。

今はそれなりに大きくなって、
実戦部隊（チームのこと）１２５人とぼくと司令長官と副官１１人と後方支援班１（諜報班とか）。
組織表はこんなもんかな。

ボス・・・ボクの事。
司令長官・・・色々事務とか依頼の対応。一人つき、１チームを受け持つ。
５人いる。
副官・・・司令長官の補佐とか不在の場合は代理も勤める。
司令長官一人につき、一人の副官。
チーム依頼とかをこなす。１チーム六人いる。
諜報班・・・情報収集とかをこなす。戦う事はまれ。
経理・事務班・・・雑用班とも、アジトの掃除とかをやる。
医務班・・・ケガの治療とか。

殺戮者に動機は無い

サーシャが少女に歩み寄り、手を差し伸べる。

「名前を教えてくれませんか？そういえば、いろいろあって自己紹介がまだですね。

わたくしはサーシャルベル。サーシャと呼んでください」

少女がサーシャの手を握る。

「・・・・・満月と書いてミツキ」

ひかえめに、ミツキは言う。

サーシャがそれを愛おしそうに見つめつつ微笑んでいた。

深夜二時　永久機関　会議室

親方が椅子に座り、物思いに耽るサーシャのとなりに座る。

サーシャはそれに気づき、親方を見上げる。

「・・・・・・・・・・あら、ボス。こんな夜更けにどうしましたか？」

「なんだか眠れなくてね。それより、ミツキちゃんはよく寝ている

よ。それにしても・・・・・・・・」
「どうして、襲われたか、ですか？」
「そう。マリアの話によるとヨーギラスのカーネリアンはCランク、つまり下っ端。サーナイトのアトスはBランク、つまり幹部。今の所、これだけがボクが知りうる情報かな」
「・・・・・・・情報が少なすぎますね。・・・・・・・・それにしても、兄さまはどこにいらっしゃるのかしら？」
「そのうち、みつかるよ。いや、きっとみつけてみせる」
「ふふふ、たのもしいですわ」
「だから、おやすみ。良い夢を、ね」
「ええ。それでは、おやすみなさい」
サーシャがたちあがり、ドアに手をかける。一度だけ、親方を見てドアを閉めた。

丑三つ時。誰もが眠る頃、ミツキは自分の夢の世界に居た。

そこは何もない、真っ白の夢。何かあったとしても、昼間や昔の記憶のカケラ。

地面等なく浮遊感のある奇妙な世界をただよっていた。

ミツキが何もないはずの空間に違和感を感じて、振り向く。

一瞬にして黒い重々しい大きい扉が表れる。

ぎい、ときしむ音をたててそれはひらく。

扉の内側からあらわれたのは、足首までを隠す長い黒いコートに、赤いマフラー、白い髪をした二十代前半の男だった。

彼はダークライを髣髴とさせた姿をしていた。

ミツキは走るように浮遊して男の胸にとびこむ。

男は愛おしい者を見るような目をしながらミツキをぎゅっとだきしめる。

ミツキは嬉しそうな顔をしながら、男を見上げる。

「ナイトメア・・・・・・・・逢いたかった」

「私もだよ、ミツキ。・・・・・・・・・・・・わたしの

」

ミツキが寂しそうな顔をしながらナイトメアの胸に顔を埋める。

「ねえ、まだみんなはみつからないの？」

「私も、捜してはいる。仕事と両立は難しいけどな」

ナイトメアはすこし苦笑しながらミツキの頭をなでる。

ナイトメアが何かに気づく。ナイトメアの前方には白い光があった。

「ミツキ、もう時間だ。また逢おう」

ミツキはナイトメアから体を離し、白い光へと進んで行く。

ミツキが振り向いて、「またね」とつぶやく。

ナイトメアはただ、優しく笑っていた。

早朝５時　永久機関隊員私室

マリアは身支度をすませ、旅の際の携帯食料や寝袋、地図等をリュックに詰めていた。

「あれもあるし、大丈夫だな」独り言を言う。

ふと何気なく、前を向くとそこにはサーシャがニコニコしながら立っていた。

「おはようございます長官。お早いですね」

「おはようございます。朝食がすみ次第、会議室に来てくださいね」

「はい。わかりました」

マリアは疑問だらけだったが、そのときになればわかることだと思って問うこともしなかった

ソーウィルは深呼吸し、会議室のドアをノックする。

「どうぞー」と声がかえってきたのでドアを開ける。

会議室にはマリア、ベアト、ミツキ、サーシャと藍色の長い髪をうなじでひとつにまとめ、

スーツをかっこよく着こなしている眼鏡をかけた十代後半に見える少女と親方が椅子に座り、

コーヒーや紅茶を飲んでいた。

ソーウィルがにこやかに全員にあいさつした。

「みなさん、おはようございます。あら、桜花副長官昨日はお見かけいたしませんでした。

どちらにいらっしゃいましたか？」

藍色の髪の少女こと、桜花副司令長官はカップを机に置きソーウィルを見て答える。

「昨日は長官に頼まれて調べものしてたんだ。まったく、人使いが荒いよ」

おおげさにあきれたふりをするが、たいしたことではなさそうだった。

親方は全員が着席したとこを確認した後、

背後にあるホワイトボートの方を向き黒のマーカーで

任務のおおまかな内容や注意事項を箇条書きにしていきながら説明した。

マリア達は各自メモや質問していった。

突然、ベアトが立ち上がり手をあげて質問する。

「質問していいですか？」

「どうぞ」

「なんで、ミツキがいっしょどうしてですか？」

「う～ん。なんとなく、かな？」

「それ、理由になってませ～ん」

「でもそのうち解ると思うよ」

これ以上質問しても無駄だと考えたのか着席する。

しばらくした後、マリア達は必要なものを持ってアジト内にある地下通路を進んでいった。

おなかがすきました

うっそうとしげった森を進んで行く一行。地図を頼りに道なき道を歩く。

～歩くこと二時間～

小さい休憩を挟みつつ目的地まであと三分の二の地点にある川のほとりで野宿をする事に。

後もう少しで川につく頃にぶっ通しで歩き続けて、不満が募るベアトはソーウィルにあたり始めた。

「あ～も～やだやだ～。つ～か～れ～た～」

「わがまま、言わないの！晩ご飯なしにするわよ！」

「え～」

このやりとりでかなり場の空気が険悪になり、

ミツキは触らぬ神に祟りなしと、無視を決め込んだ。

子供のようなけんかをマリアはうざったそうに見ていたが、

すぐよこにある大木に気配を感じてミツキとほぼ同時に大木にとびげりをした。

大木は少しゆれてなにか黄色いものが落ちてきた。

ひゅ～ごべしゃ！

ソーウィルとベアトも大木のほうの横に落ちた黄色いものを凝視する。

きいろいものがたちなおるまで沈黙があたりをつつむ。いうまでもないが、

かなりシュールな光景であった。

全員、直視しようとせず何もなかったかのように立ち去ろうとした。

振り返り、歩き始めようとしたとき、手厳しいツッコミがとんできた。

黄色いもの（ピカチュウと判明）が立ち上がり、こめかみに怒りマークをいくつも

浮かべて叫ぶ。

「無視か！」

マリアとミツキが即座に謝る。

「ごめんなさい」

しばらく説教を食らうこと一時間。
正座で説教とはなかなか見かけない光景であった。
ベアトとソーウィルはけんかなどどうでもよくなってきて、ただ二人をみていた。
遠い目で。

「まったく・・・・君たちはなんということをするんだ！」
ただいま、大剣を背負った怒りのボルテージマックス説教中のピカチュウ、
名前を聞くとレインというらしい。
マリアとミツキはなかば上の空になってきた。レイン以外のキャラの気分は早
く帰りたいとう気持ちになってきて、ソーウィルが止めに入ろうとしたとき、ソーウィル
の背後に気配が生じ、ソーウィルとベアトは振り向きつつ数歩分あとずさる。
それに気づき、残る三人も振り向く。
振り向くと其処には、薄いピンクに白いフリルのついた日傘と

ピンクの一般的にロリータとか言われるマニアが好む服を着た少女と、

その後ろに少し怯えた青い服の少年1（少女よりちいさい）と、

灰色のニット帽に灰色のシャツの少年が立っていた。

ロリータの少女が日傘を振り回しながら喚き散らす。

「あーもうー！信じらんな～い！この可愛いアタシの久しぶりの仕事が

誘拐だなんて～！ボスに訴えてやるぅ～！」

このとき、レインらが「コイツはウザイ」と思う考えが一致した。

とりあえず、邪魔者を排除するため一時手を組む事にした。

以外にも一番初めに口を開いたのはミツキであった。

「ケンカをしている場合じゃない！一時休戦だ！」

「わかった！」

レインがそれに応え、戦闘態勢に入る。

続いて、マリア、ベアト、ソーウィルも戦闘準備を始めた。

ミツキがポケットの中に手をつっこんだ。

ミツキがポケットの中から取り出したのは、二つのモンスターボール。

ミツキがボールを上に投げて言う。

「エヴァ、チカ！」

出てきたのはかわいらしいイーブイと人間や人型でいう、

右のまゆの部分から頬にかけての位置にたてに一筋、傷跡があるピカチュウだった。

（これから原型のセリフは人間の言葉でお送りします。『』は原型のセリフ

『いっくよ～』

『がんばります！』

ピカチュウのチカが意気込み、イーブイのエヴァがチカにつられていう。

ロリータの少女が黄色い声を発する。

「あ～ん。かわいい～・・・・・・ってそんな場合じゃなかった。」

「まったく、こんな上司をもった俺ってなんて不幸なんだろう」
灰色の少年がふざけつつ呆れ顔でいう。おまけでジェスチャーつきで。
「うるさいうるさ〜い！ニールのばかぁ〜！」
どうやら灰色の少年はニールという名前らしい。
全員が臨戦態勢にはいり、戦いのときはまさに始まろうとしていた。

風に飛ばされた木の葉が舞い落ちた瞬間、戦いの火蓋は落とされた。
“まもる”　ニールが様子見のため、後退しつつまもるを発動させる。
そこで、すかさずレインが“フェイント”でそれを解除させる。
連続でだすと失敗しやすいためしばらくはださないつもりか、
次は攻撃をくりだしてきた。
“きりさく”よけきれずにレインにクリーンヒット。
油断していたニールにミツキがチカに指示する。

「チカ、“ボルテッカー”。エヴァはピンクのやつに“とっしん”」
すかさずロリータの少女がキレて反論する。
「ピンクってゆーなー！ニーナっていう可愛い名前があるのにー！
ゆるさない！
“すてみタックル”」
エヴァはとまどいながらもそれをかわし、ニーナに“とっしん”を
くらわせる。
ニールは“ボルテッカー”で戦闘不能状態。蒼い少年は後ろであた
ふたしていたが、
何かを決意した様子だった。

蒼い少年が攻撃してきたのであった。
「“バブルこうせん”」
好戦的な表情は浮かんでいなかった。
すぐさま、ちりぢりによける。

ニーナが立ち上がり、傲慢な態度でこう宣言する。

「帰るわよ」

どうやら、戦いは終わったようだった。

三人は、じりじりと後退する。

マリアたちは、深追いはしないつもりでいた。

三人はすきを見ては、逃げ出そうとする。

ただただ、時は過ぎていく。

だっ、とニーナがかけだし、あとの二人もそれに続いた。

番外編　セピア色の過去に花束を（前書き）

ワンクッションというか番外編をはさみます。

番外編　セピア色の過去に花束を

親方は、書類を片付けてカレンダーを見つつつぶやく。

「そうか、もうそんなに経つんだね。思い起こせばあっというまに時は過ぎていった」

目を閉じて昔を懐かしむ。

あの頃は、彼もまだプリンで、子供だった。

サーシャが黒いコートに白いマフラーという出で立ちで、森の中を歩く。

「ずいぶん木々が大きくなりました。・・・・・・・・十年もたっているので無理もありません」

よくみると左手に二つの花束が抱えられている。

しばらく無言で歩き続ける。聞こえる音は彼女が落ち葉を踏むさくさくという音だけ。

いきなりサーシャが駆け出した。

走り出すが、すぐに息切れして立ち止まる。サーシャは傍らにある大きな岩に

座り、休憩した。

そのころ、永久機関

カレンダーに十月四日の部分に黒い〇がつけられているのをムトがみつけた。

「親方ぁ～どうして、黒い〇をつけているんですか？」

親方がしんみりした顔で、どこか遠い場所をみつめる。

「・・・・・・・その日は、命日なんだ。」

「誰の命日ですか？」

「サーシャの両親の命日」

すくっと親方が立ち上がった。

親方はサーシャが通ったであろう道を行く。

彼の耳には木ノ葉を巻き上げる風の音しか聞こえなかった。

急に背後に気配を感じ身構えるが、殺気はないので振り向いてにこやかに話しかける。

「桜花、ひとの背後に気配を消して立たないでくれるかな？」

「ごめんなさい。でも、気になったものでね。」

桜花はいたずらっぽい笑顔を浮かべる。

「用があるから行かなくちゃ」

「ボクもついて行くよ」

黙々と二人は歩き続けた。

そして、目的地にたどりついた。

「ご足労痛み入ります」

そこにはただ、厳かな空気が流れていた。

親方も、桜花も墓に黙祷を捧げた。

サーシャに優しく親方が声をかける。

「帰ろう。日が暮れてきたし、風邪を引くかもしれない」

「はい、帰りましょうか」

サーシャは一度だけ墓を見たが、前を向いて歩み始めた。

彼女もまた、前へと歩み続けねばならぬ者である。

彼女らに幸あらんことを・・・・・・

友達は１００にんもできません。

永久機関　地下資料室のうちのひとつ

桜花は古めかしい書物と真新しい資料をかかえ、資料室内の机に向かった。

桜花はノートに書物と資料の要点を書き写し始めた。

一通り書き写し終えたのか、顔を上げてのびをすると自分に似た同い年の少年が向かいに座っていることに気がついた。

「蘭（らん）、いたの？」

「二分くらい前からね。つかれただろ、はいコーヒー」

蘭はコーヒーを受け取り飲みつつたずねる。

「なにやってんの？」

「親方がこれと関連する資料を洗い直せっていわれたから」

資料を桜花が指差す。

「月の民（つきのたみ）か・・・・・・・・・・いまでもいるらしいね」

「ボクはあったことあるよ」

「ほんと？」

「任務の途中でね、親方たちと一緒に立ち寄ったんだ。隠れ里みたいなとこだよ」

「いってみたいね」

「マリアたちはそこの近くを通るからもしかしたら、ね」

「なるほど、それでか」

「おもしろそうなことになりそうだね」

さらに桜花はいくつかの伝承を比較したり、自分の兄弟を巻き込んで作業した。

作業を続けて行くと兄弟が音を上げ始めた。

「桜花ぁ～。つ～か～れ～たぁ～」

「菊花（きくか）、撫子（なでしこ）。もうすぐ終わるから」

「そんなことといってもぉ～」

「葵（あおい）、楓（かえで）。寝ないの。あと蘭。なに逃げようとしているのかな？」

「げ、ばれたか」

「あたりまえ」

「ちぇ～」

「ほら、休まず働く。残業手当もらいたいでしょ」

「へ～い」

三時間ほどで終了し、ひといきつく。

「じゃあ、おれ寝るわ」

「甘いね」

桜花が蘭の肩をがっしりとつかむ。

「毒を食らわば、皿まで。しゃーねーな」

桜花と蘭が書類をかき集め、親方のもとへと行った。

「・・・・・・・以上が検証の結果です」

桜花が説明終える。

「ごくろうさま。もう休んでもいいよ」

親方がいつもの飄々としたつかみようのない口調で労う。
桜花がドアに手をかけ、去ろうとしたとき親方が桜花を呼び止めた。
「あ、まって」
「なんでしょうか？」
「う～ん・・・・・・・・なんていったらいいのかな・・・・・・・・・・
なんというか一波乱ありそうなんだよね」
「雨とかですか？」
「そうじゃなくて、嵐。とびっきりでかいの。
ひさびさにボクが暴れられそうなくらいのでかいやつ」
「くすくす・・・・・・・・それはおもしろそうですね」
桜花が親方に毒をふくんだ禍々しい笑いをみせた。

友達は１００にんもできません。（後書き）

キャラ紹介

佐倉（さくら）　桜花（おうか）七月二十日生まれ　１４才。
容姿　髪の色藍色　目の色藍色（兄弟共通）髪の長さはロングストレートで肩の位置で一つにまとめている。
視力は良いが伊達眼鏡着用。小顔で男にも女にも見える。
性格　クール系で沈着冷静。何事に関しても傍観者の立場にいる。無表情で無口。心を開いた人には控えめな優しい笑顔を見せる。だが、普段はポーカーフェイスで他人をからかうのが好き。口調　常に敬語や丁寧語。（親しい人の場合は別）
左耳に青い薔薇のピアス。（サファイア）
戦略や知略で右に出るものはいない。ちょっと人間不信。群れることを嫌う。１６８ｃｍ。４８ｋｇ。
声の音域はソプラノよりのアルトだが、歌う時はソプラノ～アルトの音域で歌う。
蘭（らん）容姿は菊花や桜花にそっくり。
ちなみにショート。性格はかなりノリのいい明るくいつも人気者。
１６７ｃｍ５５ｋｇ。
たまに、予言めいたことを言う。裏ではかなり黒い。右耳に赤い薔薇のピアス。（ルビー）
４つ子の長女と長男（桜花が一番上）
ちなみに種族はハクリュー。
菊花（きくか）あだ名『キッカ』　桜花とそっくり。桜花との容姿の違いは眼鏡なしと髪を縛るものがないこと。
桜花と比べると感情が素直に出る。性格　明るく誰とでもすぐ仲良くなれる。
右耳に黒い薔薇のピアス。（ブラックオパール

１６６ｃｍ。４９ｋｇ。
撫子（なでしこ）ゆるく癖のあるロング。一見良家のお嬢様に見える。
性格　のんびり屋の天然系だが、仕事がらみになると非情さと冷酷さを持ち合わせた性格になる。
口調　常に敬語。左耳に紫水晶の薔薇のピアス。
１６０ｃｍ。５０ｋｇ。

楓（かえで）１３才。顔は何処にでもいるような普通の女の子。真顔、もしくは笑顔でエグい下ネタや黒いことを言う。１５８ｃｍ。４５ｋｇ。
左耳に水色（アクアマリン）１の薔薇のピアス。五月十八日生まれ。

葵（あおい）すごく鈍く、天然。仕事時は鋭く物事にツッコんで行く。
右耳にオレンジ色（トパーズ）１の薔薇のピアス。１５９ｃｍ。４６ｋｇ。
桜花、菊花、撫子、蘭。四つ子　１４才。
葵、楓。双子。　１３才
生まれた順
長女　桜花
二女　菊花
三女　撫子
長男　蘭

四女　楓　（上の四人と一つだけ年齢が離れている
五女　葵

シチューは苦手です。

そのころマリア一行は吹雪の中悪戦苦闘しながら山道を進んでいた。

「ふもとは秋だったよね？ここは一足先に冬になったのかな？」

ベアトは意味のない独り言をつぶやく。

「山の天気は変わりやすいってのは聞いたことがあるけど、ここまでひどくなるとは」

「この洞窟が見つかってよかった」

ソーウィルがマリアの言葉にあいづちをうちつつ、焚き火に薪をくべる。

「ミツキちゃん。よく寝ていますね」

「そうだね」

「私達は焚き火の不寝番。眠いのに」

ベアトが不満をもらすが、それを二人は黙殺する。

「そういえばミツキちゃんは村が焼けたときの記憶がないそうね」

「ほかのそれ以前の記憶はあるみたいだけど・・・・・・」

野宿の翌日

雪山はみごとな快晴であった。

「よく晴れたね～。なにかいいことりそう」

ベアトがのびをしながらハミングでもしそうな声色でいった。

「ほんとになにかいいことありそう」

ミツキが辺りを見回しながらこたえる。

「なにもないといいんだがねぇ」

「平穏無事でありますように」

マリアがさりげなくいいながら前へと一歩を踏み出す。

ソーウィルは太陽の方を向き祈る。

４人は自身の荷物をまとめ、

歩き始める。一歩一歩かみしめるように雪に覆われた険しい山を登った。

さくさく。雪をかき分け進むが足をとられなかなか進めない。

二時間ほど雪と格闘するものの、目的地の途中の村に到着するには後少しという所まで来た。

いきなりミツキが進行方向を変え、数歩進み雪をかき分け始めた。

三人は疑問だらけでそれを見つめていたがすぐにそれを理解した。

雪の中に埋まっていたのはグレイシアだった。

ミツキがグレイシアの傷の具合や生きているかを確認すると、こう言った。

「生きてるよ」

「ホント？」

「じゃあ、はやく手当しないと」

「こういうのは早い方がいいからな」

ちなみに発言は上から順にソーウィル、ベアト、マリアである。

ミツキがポケットからエヴァをだす。

「エヴァ、“ねがいごと”」

エヴァが“ねがいごと”を使ってから少しすると一瞬で傷が治った。

ミツキがエヴァをもどし、グレイシアをかかえる。

「進もう。立ち止まっていても意味がない」

三人はうなずきあったあと、４人と一匹（？）で歩き出した。

雪のせいで行く手を阻まれた４人は厚く積もった雪を掘り下げ、雪を積み上げてかまくらをつくって野宿した。

簡単な夕食をすませ、寝る準備をする。

ミツキはグレイシアをかかえ、優しくなでていた。

しばらくするとグレイシアが目を覚ました。

まだ、そのことにマリア達は気づいていなかった。

ミツキが前足の付け根の部分をつかみ、持ち上げ、目を合わせる。

しばらく会話しているようなやりとりが続く。（このとき、グレイシアが頷いたりした）

ミツキがグレイシアを降ろし、膝の上に乗せると寝ようとしていたソーウィルに話しかける。

「ソーウィル、目を覚ましたよ」

「ほんと？・・・・・・・ほんとだぁ～かわいいですね」

ソーウィルはグレイシアをなでたりした後、二人を呼ぼうと思ったが寝入っていたのでやめた。

「このことは明日言いましょうか」

ミツキが頷いた後、グレイシアを抱きかかえるようにして寝袋にはいった。

シチューは苦手です。（後書き）

サーシャルベル１（通称サーシャ）　種族ヤミカラス　女　１５才。
一人称は「わたくし」二人称はあなた。他人は基本的にはさん付け。
長袖の黒いワンピース（ひざ下１０ｃｍ）の右のはしっこにレースでつくったピンクの薔薇１（二枚の葉つき）にリボンがくっついたものをつけている。
青い薔薇の刺繍の白いストールをいつも肩にかけている。
左目の横の位置にある髪の毛の一ふさをリボンで結び、
レースでつくったピンクの薔薇１（二枚の葉つき）をつけている。
髪の毛も目も黒。
心優しく、何時も弱い立場の人物に力を貸す。怒ると口が悪くなる。
誕生日に青い薔薇の刺繍の白いストールをもらった。
永久機関司令長官。親方とは幼なじみ。彼の本名を知っている。

親方（これは通称でほかにもボスなどと呼ばれている
種族プクリン
年齢２５才
性別　男
性格楽天家で気さく。しかし、ときには策士として冷静に物事を対処する。
髪型はショート。前髪は原型みたいにまるいくせげ。
外見うすいピンクのＹシャツに赤いネクタイ。
薄いピンクのベストに同じ色のスラックス。
ウェストコートはもちろん薄いピンク。
外出の際には黒いコートとシルクハット。
銀製の懐中時計をもっている。
本名は不明。自分の名前がきらいらしい。

テストや諸事情により遅れました。ごめんなさい

夜も更け、魔の使者が闊歩する時間帯である。

４人は雪を踏みしめ、高山帯に位置するとある村に辿り着いた。

その村の名前はセレーネ。ポケモンと会話ができる「月の民（つきのたみ）」が住む村である。

マリアはその中でもひときわ大きい家の前に立ち、ドアをノックした。

「夜分、すみません。永久機関の者ですが」

数分すると、やさしそうな顔の中年の一歩手前の人間の男性があらわれた。

「ああ、すまないね。よびだしてしまって。中に入ってくれ」

中に入り、居間と思われる部屋に通された。

全員が席に着くと男性はあたたかいココアを自分を含め五人分用意し始めた。

男性はおだやかな笑みを浮かべ自己紹介した。

なお、話は長いのでかいつまんで記す。

男性は村の村長で代表者の月夜(つくや)。

本来は長兄が村長を継ぐはずだったが、行方不明なので代理でやっているとのこと。

世間話もそこそこに話に議題は今回の依頼の話になった。

依頼は、考古学上重要な何かがあるとされる月の民にとって大切な儀式等が執り行われる遺跡に、

凶悪な盗賊団が入り込んでいるのでどうにかしてほしいという内容だった。

何人かの月の民がケガをしたり、手持ちの原型ポケモンがひどいめにあったりと事態は深刻なので

親方はこのチームレディース1（と一人と三匹）を来たのである。

あとは、あとのチームメンバーが合流してから討伐になるので少しは休めると考えたマリアは、

村長に部屋を貸してもらい休む事にした。

余った部屋を借りて、荷物を床に置くと即席のベッドにもぐりこむ。

しばらくして、となりに寝ているソーウィルの方を向く。そして、小さな声で話しかけた。

「・・・・・・・・・ソーウィル、起きてる？」

ソーウィルはマリアの方を向いて応えた。

「起きてるわよ。どうしたの？」

「昔と比べて今はすごく幸せだなぁって。あの頃のまま生きてたら私、きっと心が壊れてたと思う」

「・・・・・・そう。でも、今はみんながいるから平気でしょ？」

「うん。今になってやっとわかった。・・・・・・・・ひまつぶしに聞いてくれる？私の過去」

「聞くわ。その次は私の番」

そしてゆっくりと、セピア色の物語は紡がれる。

マリアの過去のお話です。（前書き）

若干くらいかも知れません。
マリア視点です。

マリアの過去のお話です。

あれは十年以上前の事。

私は南のいまではリゾート地になった村の出身で私の両親がしたあることのせいで

村人にいじめられていた。

両親は村人が裏切られたと知った夜に、殺された。

私は、母が死ぬ少し前に村人が恐れて近づかない山に行きなさいといって私を逃がした。

そのころ、私は自分以外は信じられなくて猜疑心と疑心暗鬼のかたまりが

心をしめていて、口数も少ないし、

笑う事を忘れていた。

山に自生している木の実やわき水でなんとか食いつないでいた。

私がねぐらにしていた洞窟に客人が現れる冬のあの日では。

朝早く、夜明けとともに起きて木の実集めをしていた時だった。

珍しい客人、私が機関にはいるきっかけになったひとが来た。

その人が来たとき私はそっけなく村までの道を教えて最後に私の事は言うなと

口止めした。

そう、口止めしたのに・・・・・・・・・

二日後。夕方、二日前と同じ客人が私の所に来た。

やってきた彼はシャワーズの睡蓮(スイレン)は、仕事で此処に来て帰る途中で

また立ち寄ったと言った。

私は、立ち寄るひまがあればさっさと帰ればいいのにと言った。

彼は苦笑いしながら、ひどいことをいわないでくださいよといいながら

左手で私の頭をなでようとした。

私は彼の手をたたいてふりはらう。

彼はまたもや苦笑いしながら、

手ひどい歓迎ですねといいながら左手をさする。

日が暮れて、私はたき火の用意をし始めた。

私はたきぎの爆ぜる音を聞きながら彼の歌声に耳を傾けた。

歌の内容は星座の神話にまつわるのもだった。
私が他人と話をするのは六歳のとき以来、もう二年経っていた。
一人で居る時の時間は誰かと居る時よりも何倍にも感じられた。
睡蓮が歌い終わると、互いの簡単な身の上話をした。
私は時々、相づちをうったりもした。
睡蓮が
「今日、村に行くと手荒い歓迎を受けた」と言った。
私は
「孤立している村ほど部外者を嫌うから当然だ」
とそっけなく言葉を返した。
夜も更け、ボロボロの毛布にくるまり、寝ようとした時だった。
私はかがり火を持った集団が近づいて来るのを見てしまった。
すぐに睡蓮を文字通り叩き起こし、荷物をまとめて起伏にとんだ
山の最奥に逃げようと言った。
睡蓮はすぐに事情を察したようで、

目印になるであろうたき火に砂をかけて消した。
嗚呼、こんなにも近づいてるとは思いもしなかった。
聞こえる怒号、見えるかがり火。
逃げなければ殺される。本能が警鐘を鳴らす。
直感、否。それは戦慄に等しい。
一刻も速く逃げなければ。
あの逃避行はまさしく命からがらだった。
睡蓮が、追っ手を撹乱しつつ私は逃げ道を確保した。
睡蓮が自分の所属している永久機関へはいってみないかと言われ、
自分を変えるために私は、機関にはいった。

タイトルは自分で考えます（前書き）

時軸系列は現代へ

タイトルは自分で考えます

マリアが話し終わり、時計を見ると１０分ほどしか経っていなかった。

ソーウィルがマリアの頭をなでながらこういった。

「今日はもう遅いからまた明日ね。おやすみなさい」

マリアはすこし照れくさそうに

「ああ、おやすみ」

そのころベアトは毛布と白いストールをしっかりとにぎって眠っていた。

ミツキはグレイシアとエヴァとチカを抱いて寝ていた。

願わくは、皆に幸あらんことを。

だれかがそう謳った。

ミツキたちは清々しい朝をむかえた。

大きく伸びをするベアト。

髪の毛をまとめるマリア。

ヘアピンをつける為に鏡をのぞくソーウィル。

ミツキはエヴァとチカとグレイシアのブラッシングをしている。

各々身支度を整えると、朝食を食べ、正午まで自由行動となった。

一人では何かあった時に大変なので二人ずつで行動することにした。

ソーウィルとベアトは買い物に、マリアとミツキは被害状況の聞き込みと散歩にいく予定となった。

仲間の到着を待ちわびつつ、あてもなく散策するマリアとミツキ。（と三匹）

またたくまに月の民の子供達が集まってきた。

質問攻めになり、戸惑うマリア。退屈そうにながめてから、エヴァたちと遊ぶミツキ。

それが正午ぐらいまで続く。

後日談で、マリアはこう語る。

「罵られ、見捨てられたあの頃よりも、今や仲間と共に戦ってるほうが生きてるって思えるよ」

ささやかではあるが、安らかな休息の時間は何にも代え難い。

マリアはふと、村の入り口に目をむけてみた。

そこには、厚手の黄色い地に黒い稲妻模様のコートを羽織った妙齢の女性。

その右隣には、濃いめの水色の着物の少女。

妙齢の女性の後ろのには、少し怯えている黄緑のレースがたくさんついた緑のドレスの少女がいて、

辺りを見回していた。

マリアはそれにが誰だかわかり、駆け寄った。

マリアが黄色いコートの女性に駆け寄り、抱きつく。

とても晴れやかな笑顔で。

「雷菜(ライナ)！水美(ミナミ)！草花(ソウカ)！」

コートの女性はやさしくほほえむ。

「遅くなりました。ごめんなさいね。・・・・・あら？あの子はだれかしら？」

マリアがミツキを呼び寄せる。

ミツキの後ろからグレイシア、エヴァ、チカがついてくる。

「ライナ、紹介するよ。ミツキだ」

ミツキはすぐにマリアの後ろに隠れてしまった。

「ああ、ボスから話は聞いています。あなたがミツキちゃんね。

私はエレキブルのライナ。よろしくね」

ライナはしゃがみ、ミツキの目線にあわせて、自己紹介した。

ミツキはとまどいつつ、うなずく。

みんな、にこやかにミツキと談笑する。

人見知りのはげしいリーフィアのソウカ以外は。

ミツキもソウカもどう話しかけていいのかわからず、きまずくなる。

ラグラージのミナミはなんとかしようとするが、即座に諦めてしまった。

そうこうしているうちに、合流地点の村長の家の前についた。

正午には村長の家の前にチームディースの全員がそろった。

村長はありがたいことに、昼食までだしてもらった。

盗賊団とのバトルを想定し、木の実や保存食の買い出ししていたソーウィルとベアト。

ベアトがわがままを言って、大変だったとソーウィルがぐちをこぼす。

それもまた、些細だが大切な時間。

七人はゆっくりと昼食をとったあと、一休みし持ち物を整理し、旅立つ。

遺跡への道中、他愛無い会話はあったものの、近づくたびになくなっていく。

目と鼻の先となると、ただ、足音のみが聞こえる。

みな、ある一種のプレッシャーを感じている。

しかし、これもまた、喜劇と悲劇の余興にしかすぎなかった。

キャラ紹介です

キャラ紹介

チームレディース

一応チーム名はあるが今まで一度もでてない。

リーダー

マリア　キュウコン人型　女　１９才　１７２ｃｍくらい
外見　原型の体色のロングの髪をポニーテールにしている。オレンジ色のベストに黒いシャツ。
薄いオレンジ色のズボン。
性格　なんでも自分でやろうとする。それ故に、なかなか人に頼れない。なぜか胃薬常備。
イメージソング　ひぐらしのなく頃に「ｗｈｙ，ｏｒ　ｗｈｙ　ｎｏｔ」

ベアトリーチェ　チルタリスの人型　女　１６才　１６７ｃｍくらい
外見　白いふわふわのストールに空色のワンピース。（スパッツ着用）ポニテール。
性格　食いしん坊できまぐれ。けっこうリアリスト。作者的に書きにくい。
イメージソング　Ｓｏｕｎｄ　Ｈｏｒｉｚｏｎの「美しきもの」

ソーウィル　ラルトスの人型　女　１５才　１６０ｃｍくらい
外見　薄い緑色のベストに白いブラウス。白いロングスカートに白いカーディガン。ショートヘア。

赤いヘアピンを右側につけている。
性格　優しくてお母さんみたい。かわらずのいしで進化していない。皆がふざけてお母さんと呼んでいる。
なぜか三人の中で一番年上っぽい。
イメージソング　Ｓｏｕｎｄ　Ｈｒｉｚｏｎの「焔」

主人公　ミツキ（漢字表記は満月）　１０さいくらい　性別　女
人間　１４０ｃｍくらい
外見　うすめの水色のパーカーのフードを深くかぶっている。うす茶色のズボンにオレンジのスニーカー。
性格　大人っぽく冷静沈着。口数はとても少ない。作者的に書きやすい。
イメージソング　アニメ　うみねこのなく頃にＯＰ「片翼の鳥」

敵が動く（前書き）

過去にキャラを下さった方、ありがとうございます。

敵が動く

ノワール団基地　幹部に与えられる部屋の一室

黒いシャツに青色のジーパン姿のくすんだ茶色のショートヘアの男が「ギラ」とネームプレートがかけられている部屋で寝ていた。

アトスが盛大にいびきをかいている男に近づく。

「・・・・・・ギラ。任務」

無表情で白い厚ぼったい防寒コートの男、サーナイトのアトスが部屋の主であろう男の身体を揺らして起こそうとする。

さらに軽く揺り動かす。

まったく起きようとしないギラに苛立ったアトスは強硬手段にでた。

「・・・・・・“サイコキネシス”」

タイプ一致かつ、効果抜群は格闘タイプの彼には大ダメージ。

彼は跳ね起きる。

「せっかく、気持ちよく寝ていたのに、起こすんじゃねぇ！てか、永眠させる気か！」

「・・・・・手加減した」

いきなり、後ろのドアが勢いよく開かれる。

そこには怒り心頭のニーナが仁王立ちで立っていて、

後ろに蒼い少年が心配そうに様子をうかがっていた。

ニーナがためらいなく入ってきて、

「至急、臨戦体制に。時間はないわ」

また、血塗られたワルツが踊られる。

慌ただしく、めまぐるしく、変動する。

アトスはコートを取りに、自室に戻る。

ギラも、ニーナも指定された場所に移動する。

その他のしたっぱらも移動する。

自室に戻ると、指令が書かれた紙が机に置かれており、

それにすばやく目を通すと、アトスは“テレポート”した。
終わること無き、歴史と過ちはまた繰り返される。
それを止める術(すべ)はない。

嗚呼(ああ)、また繰り返される過ちを誰も止められやしない。
それを止めておくれ。世界中の誰もが「赦さない」と言った罪を私が赦そう。

儚く、小さき人の子らよ。

聖書　４３８ページより。（創作です。実在する詩ではありません）

聖書をミナミは諳(そら)んじていた。

一言も聞き逃すまいとするミツキを見て和むマリア、ソーウィル、ライナ。

ソウカはおもしろくなさそうにいじけていた。

今は、遺跡が見える丘で休憩しているところだった。

皆、それぞれに複雑な思いを抱えて戦うしかないのだ。
大きな戦も、小さな戦も、戦であることにかわりはない。

永久機関　機関長室

親方は待っていた。
時は既に満ちた。
ドアが軽くノックされると、姿勢を正す。
「入って」
入ってきたのは、物静かでどこかなげやりな表情のブラッキーの青年んブラックと
おっとりして優しげな雰囲気のデリバードの青年シャロルだった。
ブラックは気怠そうに
「いきなり集めて何の用ですか？」
親方は突拍子もないことをいった。
「今からエマージェンシーコールを発動しようと思う」

「!?・・・・・・・あの、留守部隊以外が戦場に総出動するときのアレですか」

「そう、それ。その時がきたみたい。今から場所を指定するから、“テレポート”できるやつと行って。

道具、忘れないでね」

ぽつりと、シャロルがつぶやく。

「戦わなくていいような世界がいいよね」

親方はどこか悲しげに

「そういう日のために戦う。いつかみんなが笑って過ごせるように」

二人はだまって部屋を後にした。

敵が動く（後書き）

オレンGさん　キャラ提供
１名前　ギラ
２性別　♂
３種族　サワムラー・原型
４所属　ノワール団（できればBの幹部でお願いします）
５所属している理由　ノワール団にスカウトされた
６性格　おだやかで、よく寝ている。だが、戦闘になると、鬼のような目つきになる
７服装　黒いTシャツと青いジーパンと、シンプルな服装
８サンプルボイス
「はぁ～・・・眠いのに・・・・」
「俺は寝るから、お前らだけでミッションやってろ！」
「お前ら、もうやられたのか？・・仕方ない・・仇でも撃つか・・」
「お前ら弱いくせに、いきがってんじゃねぇよ！」
９クセや書く場合に注意してほしい事　戦闘中はしゃべりません

ヤギさん　キャラ提供
名前　シャロル
年齢　１４
性別　♂
種族　デリバード（人型）
所属：医務班
所属している理由
・薬草を探しに散歩している時、たまたま吹雪で遭難している人を助けたら「いい腕してるから医務班に言ったらどう？」と言われたからしい。

性格

・基本、優しくておっとりしているが、それは表の顔。裏の顔になると（いじめられたり、傷ついてる人がいると）

腹黒くなって「怖いやつ」になってしまう。ただし決して悪いヤツではなくボケキャラがうけ顔が広い。

昔たき火をしていたら大やけどを腕におってしまったため、以来、炎恐怖症に。寒さにはめっぽう強い元気なやつ。

服装

・頭に茶色の飛行帽をかぶっており、でこと後ろ首と頬の辺りに短いぼさぼさの灰色の髪が少しでている。

（服装じゃないですが）背が１４のわりには少し小さい。

アイカラーは黒ベースで深い青色が少し混じっている。

黒のだぶだぶマフラーをしていて赤いダッフルコートを着用。

氷の結晶の飾りがついた白いベルトをしている。靴は黄金色のブーツ。いつも肩に灰色の大きな袋をしょっている。

セリフサンプル

・表の顔・

「どうしたの？何か悲しい事でもあったの？何かあったら僕に言ってね。きっと元気にしてあげるから！」

「弱いものいじめはぁ・・・・だめぇーーーーっっ！！！」

・裏の顔・

「黙れガキ！おまえ意外に重体の患者は山ほどいるんだよぉ！！」

「ひぃぃぃっ！やだやだ！炎こえぇぇぇ！！！」

クセや書く場合に注意してほしい事

・裏の顔になったら、モモンの実をあげてください。すぐに表に戻ります。

過去にやったやつの再掲載は面倒です

チームレディース、ノワール団、永久機関の全員。

それぞれがそれぞれの思いをかかえ、集まる。

ある者は、護る為に。

ある者は、欲するが故に。

ある者は、捜す為に。

ほら、時が動き出す音が聞こえる。

新たな戦の胎動を感じる。

見えるは惨劇と焦土。

歴史が騙らざる黒歴史を綴る物語。

まず、先に遺跡に入ったのはチームレディース。

その次にノワール団。
最後に永久機関のほとんどのメンバー。
そのころのチームレディース
ミツキが先頭で歩き、マリア、ソーウィル、ベアト、ライナ、ミナミと続き最後尾はソウカ。
遺跡は複雑に入り組んでいて、出口のない迷宮を思わせた。
おまけに薄暗く、ランタンの灯りがたよりなさげにゆれていた。
ふと、ミツキが立ち止まり壁をいじりはじめた。
壁からわずかだが、風が流れ込んできている。
しばらくして、カチリという小さな音が聞こえると、壁が動いた。

壁の奥にはさらに迷路が続いていた。
ミツキは風が流れる方へ進んでいく。
あとの六人は引きずられるようについていくしかなかった。
大広間のような所にたどりついた。

天井に窓が取り付けられており、そこから光と風が入ってきている。
広間の中央に金色と漆黒の玉が東側と西側にあり、台座の上で輝いていた。
金色の玉は淡く、優しく輝く。
漆黒の玉は強く、怪しく輝く。
ミツキは躊躇いもせず漆黒の玉を手にした。
ミツキが玉を手にすると、突然玉が黒紫の光を放ちはじめた。

誰もが眩しいので目をつぶったり、手で光を遮ろうとした。
それは数秒で終わり、ミツキの傍には、白い髪に黒いコート、赤いマフラーの青年が立っていた。
いつのまにか、玉はなくなっていることにミツキは気づいた。
そして、金色の玉も光を放ちはじめた。
光が収まると青年の立っている反対側に
ごく軽く、織られた淡い金色のストールをみにつけた若い女性がたっていた。

金色の玉もいつのまにかなくなっていた。
女性は
「なぜ、貴女は黒の宝玉を選んだの？」
優しく歌うようにミツキに問いかける。
ミツキはじっと女性をみつめていた。
無言のまま時間が過ぎる。
重く、苦しい沈黙。
刹那、地響きが起き、ミツキ達は遺跡から出ようとした。

少し前、遺跡前
永久機関メンバーとノワール団は対峙していた。
睨み合っていると紫色のボロボロのマントをはおった若い男と、
目に白い包帯を幾重にも巻き付けた水色の服の少年と、骸骨の仮面
を付けた少年が出てきた。
またしても、睨み合いとなってしまった。

遺跡の反対側、村の方から不穏な動きを察知したのであろうか、
月の民で原型を従えた十人ほどの男達がやって来て、予想外の事態となった。
先頭は村長の月夜(つくや)で息を切らしつつも親方にこう告げた。
「はあっ、はあっ、・・・・・・・遺跡の隠し部屋の宝玉が何者かが触れたようだ」
「?!昔話してくれたあの宝玉?・・・・・・・
チームハートはボクと、残りはここで戦闘態勢で待機!月夜!行くよ!」
「了解!」
「ああ」

月夜が遺跡の入り口の付近で壁の不自然なくぼみに、
つきの民の証んほひらべったい雫型の透明のガラスのようなものに黒い
三日月の模様のはいったペンダントをはめこむ。

数秒後、地響きがして、通路が出現する。

「急ぎましょう」

そして、かけだす。

走りつつも会話を続ける。

「ねぇ、月夜。昔こっそり見せてくれた黒と金の宝玉だよね？」

「ええ、あの後、こっぴどく怒られましたが」

さらに月夜はつづける。

「黒はダークライ、金はクレセリアを表す宝玉で、先祖が祀りはじめたものです」

「この、“月の遺跡”・・・・・月はクレセリア・・・・・なるほど。なぜ、ダークライ？」

「さぁ」

「だれだろうね、侵入者」

「とにかく、急ぎましょう」

親方たちがかけつけたと同時に女性と青年の火花が散りはじめた。

親方は状況を把握できず、とまどう。
ミツキはどうにかしようと、二人の間にわって入るが何もできなかった。
とりあえず、状況を整理しようとマリアが二人の素性を聞く。
女性はさきほどとはうってかわってにこやかにあいさつする。
「私はクレセリアのサリアです。よろしくね」
青年の方もはにかみつつあいさつする。
「私はダークライのナイトメアだ。よろしくな」
マリア達も簡単なあいさつをする。
そして、後から来たチームハートも。
「オレはオーダイルのアルト」
「アタシはウィンディのディアナ」
「ボクはトゲキッスの幸夜(こうや)です」
「私はオオタチのるちあだよ！」
「私はデンリュウのメルトです

「・・・・・ウツドンのかづら」

かづらは相当なてれやなようでかぶっている帽子をふかくかぶる。

過去にやったやつの再掲載は面倒です（後書き）

キャラデータ
名前　アトス
サーナイト　人型　トレース
年齢　１９
性別　男
性格　おとなしく、あまりしゃべらない。セリフはほぼ単語。とある理由でノワール団に所属。
　それ故に、自由はない。
身長　１７０くらい。かなり細い。
見た目　白くて長いコートに茶色い革靴。緑のセーター。ショートヘア。
その他　Ｂランク幹部。

名前　ニーナ
性別　女
年齢　１６
エネコ　人型　メロメロボディ
性格　ぶりっ子で計算高い。強い者に媚びる。（作者的に一番むかつくキャラ）
　自分さえよければそれでいいと思っている。で、ナルシスト。
見た目　白いフリルとかがたくさんついたピンクのロリータ系の服。服と同じような日傘。
　（暑苦しくないのか疑問）
その他　Ｂランク幹部。

キャラデータ

名前　ニール
性別　男
ニャルマー　人型
年齢　１４
性格　きまぐれでいいかげん。自分がよければ、それでよし。利害の一致で行動する。
見た目　灰色のセーターに灰色のニット帽。黒い短パン。ふわふわのクセっ毛。
その他　Ｃランク。ニーナの部下。

名前　蒼太（そうた）
性別　男
マリルリ　人型
性格　おとなしく、あまり発言しない。人形みたい。
見た目　白いＹシャツに原型のお腹の模様のベスト。ジーンズ。女の子みたいな可愛い顔。
その他　Ｃランク。ニーナの部下。かわいいのでニーナのおもちゃになっている。別名ブルードール。
　ジョディアさんのレインと一緒のときにいたときに、ニーナといた蒼いやつがコイツ。

チームハートの簡易説明
リーダー　オーダイル♂　アルト　いじっぱり。かなり素直じゃない。
　デンリュウ♂　メルト　やんちゃ。昔は不良で怖いお兄さんの一団をまとめてた。
　オオタチ♀　るちあ　がんばりや。チームのおかん。
　ウィンディ♀　ディアナ　むじゃき。チームのムードメーカー。頭のネジが二、三本たりない。

トゲキッス♂　幸夜(コウヤ)うっかりや。腹黒い子供好き。甘く見てるとエライ目にあう。
要注意。危険人物。直接殴るのではなく、遠距離で嬲るのが好きなドS。
よくうっかりどころではすまないミスをする。
ウツドン　♂　かづら　てれや。はずかしがりや。いつもだれかの後ろに隠れてる。唯一の常識人。
私のハートゴールドのてもちがもとです。

味付け海苔だけでご飯三杯はいけます

ダイークライのナイトメアとクレセリアのサリアに事情を説明し、外に出ることにした。

月夜が先頭を走り、親方がすばやく指示をだす。

遺跡を出ると、そこには・・・・・・・・・

そこには、漆黒の男としか形容しがたい男がノワール団の軍勢の前に立ちはだかっていた。

親方は、その男をじっくりと見ていた。

やがて、気づいてしまった。

親方の表情が驚愕を示すものに変わる。

嗚呼、これは運命のいたずらなのだろうか。

否、すべては些細なできごとから運命の歯車が狂い、軋み、変形した結果であろう。

親方は冷たい汗が背中にすべり落ちるのを感じながら戦慄する。

「やっぱり・・・・・キミだったんだね。黒羽（クロハ）」

「ひさひぶりだな。アイリス」

永久機関のメンバーに動揺がはしった。

後続で遺跡から出てきたミツキ達やチームハートも驚く。

まさか、こんな名前だったとは、と。

クロハはノワール団陣営に歩み寄る。

「ぼくは、目撃情報からの憶測でキミだとは思いたくはなかったが、今、確信したよ。

キミがノワール団ボスだって」

「・・・・・いかにも。私がノワール団ボスだ」

盗賊団らしき集団1（ズバット、ヨマワル、ドラピオン）が無視されたので抗議にでる。

「オレらを無視すんじゃねぇ！」

「そーだ！そーだ！」

「わけわかんねーぞ！」

「“シャドーボール”」

「“あくのはどう”」

三人組の右スレスレで二つの技が炸裂する。おののく、三人。

「黙っていてくれないかなぁ？」

「うるさいぞ」

「はい・・・・・」

サーシャは中庭で昼間の空を眺める。

全員無事で帰還することを願いつつ。

桜花がそばによる。

祈り、待ち続けることしかできない自分に歯痒さを感じるサーシャ。

「・・・・・無理しなくていいよ」

「何のことかしら？」

「だからね、苦しいときは苦しいっていわないとダメだよ。悲しいときもね」

「わたくしは、今更泣けません。もう、昔のことですから」

「関係ないよ」

「ですがっ！」

サーシャの猛反撃を無視して頭を撫でた後、抱きしめた。まるで幼子をあやすように。

押し殺した鳴き声といいたかった本当のことを聞きつつ、すべてを受け止める。

彼女はその覚悟ができていた。

今は待ち続けるしかないのである。

月の遺跡前　午後三時

ミツキがクロハを凝視。

何かを思い出したようで表情が僅かに色を変える。

「・・・・・・思い出した。あの人が村を焼いた」

「なんだって?！本当?ミツキ」

だまってうなずく。

「見た、というより見てしまった。・・・・・・間違いない」

「いかにも」

嗚呼、すべては仕組まれたことかもしれない。

クロハはじりじりと接近する。

「ミツキちゃんはわさたない」

アイリスが左半身を前にし、すりあし。

クロハはでかたをうかがう。

「“ブレイブバード”」

アイリスがちいさなつぶやきにも等しい声で言葉を紡ぐ。

「“　　”、“　　”、“　　”」

刹那、二人の位置が入れ替わる。

アイリスがいた所にはピンクの人形が転がっているだけだった。

クロハに激しい動揺がみうけられる。

と、同時に片方のひざを付いた。

「ぐ、・・・・これは・・・・・“みがわり”と“でんじは”か！」

「あったりぃ～。そんでぇ～・・・・“メガトンパンチ”！」

マリアは紡がれた技の言霊は三つであったはずだということに気がついた。

アイリスの“メガトンパンチ”はクロハのみぞおちにヒット。

「がはっ」

なんとかもちこたえ、攻勢にでる。

「“ばかぢからっ”！」

よけようとするが、腕をつかまれているのでよけきれない。

零距離で捨て身の攻撃である。

これはアイリスにとって不測の事態であるだろう。

「っ！“まもる”！」

防御したつもりだが、かすってしまった。

かすってもかなりの威力のようで右脇腹に血がにじみ、吐血した。

「がはっ・・・・ごほごほ」

跳んであとずさり。
アイリスがキラキラ光り回復する。
「・・・・このことを見込んで“ねがいごと”か」
「かはっ・・・・ぺっ。そういうこと」
先ほどの三つの技は“ねがいごと”と、“でんじは”、“みがわり”だった。
終わりなき戦いは続くだろう。

頂点に君臨する者の戦いを周りの者は見ているだけであった。
だが、惚(ほう)けている者ばかりではなかった。
盗賊団が我に返り行動する。
「無視すんじゃねーぞ！」
二人につっこむ。
アイリスは右に、クロハは左に跳ぶ。
「・・・クケケッ、楽しそうだナ・・・。俺と遊ぼウ」

バトルを観戦していて戦いたい衝動が押さえ切れなくなったのか、
銀色のセミロングのゲンガーの女性がアイリスにつかみかかる。
後日、髪の毛が銀色の理由は突然変異の先天性のものと判明。
またもや無視された盗賊団。
クロハはよろめきつつミツキにむかって走る。
マリアたち、チームレディースが防ごうにも、ギラ、アトス、ニーナ、ニールが阻む。
「・・・・・・させない」
「前回、よくもコケにしてくれたわねぇ！」
「しょうがない、やるか」
「おもしろくなったきたね」

味付け海苔だけでご飯三杯はいけます（後書き）

雪下さん　キャラ提供
名前　フラン
年齢　１７歳
性別　女
種族　ゲンガー
所属　ノワール団　幹部
所属している理由　スカウトされた
性格　面倒くさがりで毒舌。飄々としていて掴み所が無い自由奔放な性格。お菓子が好きでよく片手にお菓子の袋を持っている。
服装　肩の所で切り揃えたセミロングの銀色の髪に朱色の鋭い眼、黒いパーカーにジーンズ。
　身長が低く小柄。
セリフサンプル
「・・・クケケッ、面白くなってきやがったナ・・・。」
「俺はフランっていうんダ。よろしくナ。」
クセや書く場合に注意してほしい事
語尾がカタカナで、男口調です。一人称が『俺』ですw
笑い方が特徴的です。l（セリフサンプルに書いています）

情報は一切改変しておりません。

空腹の先に何があるのか

争いの中で取り残されたミツキ。

エヴァとチカをボールからだしておらず、グレイシアをかかえたまま。

クロハが音もなく忍び寄り、手刀で気絶させる。

ミツキは気絶しているにもかかわらず、しっかりとグレイシアをかかえている。

グレイシアのほうも離れるまいとしてしがみつき、服を咬む。

クロハはそんなことに歯牙にもかけず、アトスに目配せ。

後退するアトス。

「・・・・・“テレポート”」

“テレポート”で消え入る前にマリアがミツキをつかもうとするが、つかめず、消える。

脱兎のごとくノワール団は逃走し、残されたのは永久機関メンバーのみ。

虚しさと、くさしさだけが残った。

永久機関　司令長官室　午後　ひるさがり

サーシャは机につっぷして眠っていた。

桜花がそっとサーシャに毛布をかける。

大きく、ゆったりとしたソファにゆっくりとすわる。

テーブルにはティーポットとカップがふたつ。それに砂糖とミルクも。

ドアをぼんやりながめていると、

黒いノースリーブの上に防寒用のコートを着てだらしなくダメージジーンズをはいている

ヘルガーの青年アルムと桜花の弟のランが入ってきた。

サーシャを見て、二人とも事情を察したのか足音をたてずにソファにすわる。

そして、小声で

「よくねてるね」

そっと桜花に話しかける蘭（ラン）。

「そうだね」

「寝る子は育つ、だな」

ぼそっと桜花がつぶやく。

「そうに違いない」

と、アルムがさりげなく相槌をうつ。

「ほんとだね」

「紅茶飲む？」

さりげなく桜花がティーポットを示す。

「飲む」

「たのむな」

「追加のカップと紅茶用意するね」

桜花は席を立つ。そして、サーシャを一度見てから食堂に行った。

ノワール団　地下牢

ミツキは薄暗い牢獄で目を覚ました。

ぼろいうすちゃいろの毛布、高い位置にある小さい四角い窓。

灰色のコンクリートの壁とドアと白いトイレ、食事を渡す為の郵便受けのような長方形の穴。

日本の刑務所並みに設備が整っていた。

幸い、モンスターボールはとられなかった。

あの、グレイシアはどこにいるのか穴を覗き込んでみる。

が、同じような部屋が三つほどあるぐらいしかわからなかった。

ミツキは自分がもつ、月の民の力をつかうために心を、第六感を研ぎすませる。

普段は特別集中しなくてもいいのだが、今回は居場所がわからないからようだ。

『オイ、ミツキ。どこだ？』

ぶっきらぼうな声が聞こえる。

『牢獄のなか』

『オレもだ』

『氷雨のほかにも誰かいる』

『！・・・・そうか。そいつに話しかけられるか？』

『やってみる』

閉ざされたなかにいるものとは？

ミツキは囚われているであろう人物と囚われたいきさつを聞いた。

しばらくしてると、ミツキは窓から差し込む光がオレンジに変わっていることにきがついた。

今は初冬、山にあるのかとても冷え込んでくる。

毛布にくるまる。

ドアの向こうの看守らしき人物の不満だけが部屋に響く。

独りのようで独りでなく、独りのようでなくて独り。

孤独、不安、恐怖、虚無感、猜疑。全てないまぜになった気持ちがミツキの心をうめつくす。

横になり、天井を見上げる。

窓に手を伸ばしてみるが、悲しいほどにとどかない。
あらためて、自分の無力さを感じたのか一すじの涙が零れ落ちる。
そのとき、重いものが落ちる音とガチャリという音がしてすぐに扉が開かれた。
「泣いてんじゃねぇぞ。泣き虫」
そこにたっていたのは・・・・・・・

ミツキはすぐさま、水色の少年にだきついた。
悲しみの色顔をくもらせつつミツキは力いっぱいだきしめる。
水色の少年は苦笑を浮かべ、豪快に頭を撫でる。
「さぁ、早いとこ脱出するぞ！」
「・・・・・みんなのところに戻りたい」
「泣くなよ。みっともない」
「・・・・・泣かないよ」

「じゃあ、地図とカギはゲットしたし、そろそろ行くか。オイ、ふたりとも！置いていくぞ」

時は動き出した。

いまはまだ、ほんの予兆にしかすぎないが。

空腹の先に何があるのか（後書き）

Ｔａｋａ　さん提供
名前　アルム
年齢　２３
性別　男
種族　ヘルガー・人型
（人間はでないと思います。ポケモンの場合は原型か人型か）
所属　永久機関・諜報部
（主人公サイドの永久機関か、敵のノワール団か、無所属か）
所属している理由
戦闘力は高いのだが、「もう歳だから」という理由をつけている
性格
年齢の割に年寄りくさく、何処か達観している青年無気力で胡散臭いところもあるが、
ケジメはしっかりとつける
服装
ボサボサの黒髪に、憂いを帯びた金色の瞳
黒のノースリーブに、ダメージジーンズをだらしなく履いている
首には、髑髏を象った銀のペンダント　ヘビースモーカーで、煙草を肌身離さず持っている
セリフサンプル
「いやぁ、若いっていいねぇ……」
「ふー……。この歳になると、色々あるのさ」
「俺も漢（おとこ）だし、ここで頑張っとくかね」
クセや書く場合に注意してほしい事
差し支え無ければ、年下の仲間から「おっちゃん」と呼ばれる設定をお願いします

挫折します。（前書き）

ここまでのあらすじ
なぜかノワール団ボス、クロハに囚われたミツキ。ミツキにしがみついてついてきたグレイシア1（原型）。
気がつくと牢獄。牢番を倒し、ミツキと他の囚人二人1（キルリアのキールとキリル）を救い出したのはグレイシア1（人型）の氷雨だった。
彼は人型だが原型に変身できる特殊能力があった。
1（専門書にはこの能力を持って生まれる確率はかなり低いと書かれている）

挫折します。

やけに静かな通気孔をはいながら、小声で会話を続ける。

最前は氷雨、キリル、キール、ミツキの順で進む。

「・・・・・ったく、せまいな。おい、ミツキ、キリル、キール。大丈夫か？」

「ボクは大丈夫。氷雨は？」

「へーきだよぉ」

「だいじょーぶぅ」

「オレはいいが・・・・・・原型にもどろうか？小回りが利くし」

「ボク以外話が通じなくなるからダメ」

「オレは原型の姿が好きなんだけどなぁ」

「それに、服回収するのはボクなのに。原型から人型になるとき着替える場所がないよ」

「一理ある」

薄暗い中を進んでいく。

終わりはあるのだろうか。

注意、氷雨の服は監視役の人から奪いました。

ノワール団本部　とある研究室

クロハはだらけてぼけーっとしているぼさぼさ頭のポリゴンZの青年ノーベルに近づく。

やがて、寝ていることがわかるとノーベルがねているにもかかわらず思いっきり蹴り倒す。

クロハは相当な怒りのようでこめかみに青筋が浮かんでいる。

クロハのあまりの乱心ぶりに研究室のすみでふるえるノーベルの部下たち。

ねぼけつついい加減でてきとーなことを言うノーベル。

「・・・・・むにゃ・・・・地震？敵襲？」

「バカか。実はこれが今回の研究対象だ」

クロハが藍色の髪の毛が十数本はいった小ビンをとりだしノーベルに無造作に投げてわたす。

「なんすかこれ？髪の毛？」

「月の民のな」

「ああ、件(くだん)の・・・・で？」

「ＤＮＡの構造を調べてほしい」

「ほかになんかあります？」

「これも、さっきのやつと同じでＤＮＡの構造がきになる」

こんどは水色の毛が十本ほど入った小ビンをまた投げる。

「なんの毛っすか？」

「しらべればすぐわかるだろう」

クロハは靴音を響かせ去っていった。

此の様子を氷雨はデカイ空調ダクトからのぞいていた。

そして悪態をつく。

（あんの野郎！オレの頭に十円ハゲつくりやがって・・・・・しかもミツキまで！）

怒りに燃えていた。

氷雨は地図を片手に分岐点を確認しながら、匍匐(ほふく)前進。

ミツキが、声に出さずテレパシーでぐちをこぼす。

『つかれた』

『もんくはナシだ』

『いつになったらでられるの？』

『次、右に曲がって左に曲がれば外に出られる』

『了解』

縦横無尽に、時には上下にはしる空調ダクトを同じ姿勢で進むのは意外にも重労働。

子供ならなおさら。

氷雨は前方に鉄格子があることに気がついた。

声をだすと聞かれることを恐れテレパシーでミツキに少し戻ることを伝え、

分岐点まで戻り方向転換して鉄格子を蹴破った。

氷雨が軽々と二階建ての建物の排気口から飛び降りる。

その後、キリルとキールが“ねんりき”で着地時の衝撃を和らげながら着地。

ミツキが飛び降りる。それを氷雨が受け止めて、全員が走り出す。

空は満天の星空。かなりの時間が経っていた。

突如、サイレンが鳴り響く。

「ちっ、気づきやがったか」

「機関の方向は星の位置でだいたいわかる」

「どっちだ？」

「西」

「追っ手とおれら、どっちが速いか命をかけたレースの始まりだ！」

追っ手の気配を察知したキール。

「来るよ。北から。近いよ」

「まずいね。撒ける自信がない」

ミツキの肩に乗っていたチカにが何かを訴えかける。

「チカ？・・・・・・いちかばちか。賭けてみようか」

手短に話し、皆頷く。

「じゃあ、作戦実行」

追っ手の包囲網をくぐり抜け、街道付近まで走る。

猛スピードで何かが走ってくる。

今は土煙のみが見えるだけ。
氷雨は慎重に行動に移す。
危険な賭けであることは重々承知している。
しかし、今やらねばチャンスは一度のみ、失敗すれば命が危ない。
土煙につつまれた何かが近くに来た時、氷雨はとびだした。
これが喜劇の幕開けとは知らずに。

氷雨の数メートル前でなにかは止まる。
それは荷馬車であった。これほど速く奔(はし)る荷馬車を氷雨は知らなかった。
燃え盛るように鮮やかなオレンジのロングヘアの少女に追われているなどのことを手短に説明し、
全員を乗せてもらうことに。
やがて軽やかに荷馬車は奔りだす。
ミツキは地図を荷馬車の奥からひっぱりだし、永久機関のあたりを指定する。

「ああ、永久機関でしょ？用件ははやくいってね」
氷雨は荷馬車の後ろから、ミツキは右を、
キリルとキールは左を見回り追っ手がいないか確認を怠らない。
「よっしゃ！永久機関までとばすよー！」
さらに速度が増す。
転がりはじめた運命は坂に終わりがくるまでとまらない。否、とめられない。

眠気を振り払うように氷雨達は荷馬車の主、運び屋のギャロップの女性ミユに矢継ぎ早に話す。
ミユもいいねむけざましと考えたのか話に応じる。
しばらく追っ手はこないと判断し、一時休憩。
ミツキはミユに地図をのぞきこみながら、あとどのぐらいかをたずねる。
氷雨は警戒し、見張りを務める。
キリルとキールは緊張状態が解けてほっとしたのかねむりこんでし

まった。

ミユと氷雨がふたりをかつぎ、荷馬車におしこんだ。

東の空が僅かに色を変えたとき、ふたたび西へと進んだ。

挫折します。（後書き）

えかさん　提供
名前：ノーベル
年齢：２０
性別：男
種族：人型，ポリゴンＺ
（とくせい：ダウンロード）
所属：ノワール団の幹部さん
所属している理由：研究施設とまちがえて就職志願→就職→あれ？
→楽しいからいっか
性格：何においても適当。まず人の話をきかない。
「そうだな」と適当に相槌をうつ。
頭はとてもよく，計算高い。計画的な戦い方をする。
ノワール団の参謀的存在
自分の「てきとう」な性格も，これが一番便利だと考えたうえで演じている。
しかし，珍しいもの，興味のあるものを見つけると，
もう後先は考えず，思いつきで行動しまくる。
これが吉とでたり凶とでたり。
無意識にドＳで，きつい言葉をぼそっと吐き，
相手が傷つくのをみて癒されている。
服装：ぼっさぼさのピンク髪。顔と肩のちょうどまんなかくらいまで伸びている。
ヘッドホンをつけている（ポリゴンＺの眼のような模様です）
いかにもやる気のない灰色の目。白衣。
ボタンはとめておらず，全開。
中は研究員らしく，白のワイシャツ，ピンクのネクタイ，水色のベスト。

ただしズボンがピンクと水色のストライプ柄。おそろしくセンスがわるい。
靴は水色のローファー。
長身でひょろひょろ。老けて見られる。くわえタバコ。
セリフサンプル：「ノーベルっていうんだ。よろしく」
「こんな最前線まで来て言うのもなんだけど，俺，肉弾戦苦手なんだよねえ」
「そうだな，まあ頑張ってくれい」
「あんたのソレ，面白いな！ちょっと研究させてくれよ！」
「・・・あんた，弱いんだなあ」
クセや書く場合に注意してほしい事：
「だなあ」「だねえ」等，語尾をのばすクセありです。
センスの悪さを指摘されると怒ります。

キャラ紹介
氷雨（ひさめ）　グレイシア　♂　人型　１６歳　１６５ｃｍ
なまいきでどこか冷めた口調で話す。
なぜかいうと、人型と原型に自由に姿を変えられる特殊能力を親に気味悪がられ幼少期に捨てられた。
絶望の中、救いの手を差し伸べたのはミツキだった。
かなりの甘党。
味覚音痴の疑いあり。
水色のセーターに紺色のズボン。原型のついてるひもっぽいかざりがついた濃い水色のニット帽。

キリルとキール　キルリア　♀&♂　１２歳　１４９ｃｍ
ノワール団の地下牢に囚われていた。
キールは色違いで将来はエルレイド予定。

キリル
キミドリのスカートに白いブラウス。赤いヘアピン。
キール
青い短パンに白いブラウス。オレンジのヘアピン。
アトスの双子の弟と妹。
ふたりを人質にとられ脅迫され、アトスは従うしかなかった。

キャラ紹介
ナイトメア　ダークライ　♂　二十代後半、三十路手前　１８６ｃｍ　７０ｋｇ
若干長い白髪に水色の瞳。真っ赤なマフラーに黒いコート。
なかなかの優男でイケメン。十人中八人が振り向くぐらい。
図鑑の説明に似合わず、おだやかで争いごとを好まない。
昔、マジギレして自己嫌悪に陥り夢の世界に最近まで引きこもっていた。
花の世話とか家事全般が得意な家庭的なひと。

サリア　クレセリア　♀　二十代後半　１６４ｃｍ
ヒモ・・・げふん、げふん。もとい、生活の面倒をみてくれるひとがいなければ生活できない。
ナイトメアに執拗につっかかる。目の敵にしており、大嫌い。ナイトメアと仲がいいミツキも嫌い。
それがなければ、基本いいひと。美女というまでもないが、きれい。

キャラ紹介
チームレディース　そのたメンバー

雷菜（ライナ）　エレキブル　♀　１７歳　１６６ｃｍ

黄色の地に黒い稲妻模様のコート。黒いマフラーに黒いリボンでツーサイドアップ。ひざぐらいのブロンド。
かわいらしい顔立ちに大抵の男性はオトせると、本人談。
いつも笑顔を絶やさない大人。
子供好きで面倒見が良いので保母さんをめざしていたことがある。
チーム一番の怪力。なめてかかるといたい目みるよ。

草華（ソウカ）　リーフィア　♀　１４歳　１５４ｃｍ
チーム一のわがままでおこちゃま。泣けば思い通りになるとおもってる。そのくせ、バトルは強い。
過去の武勇憚は、リングマを投げ飛ばし、ドサイドンを倒し、マンムーをフルボッコなど・・・・
すそは淡い緑で上にいくとクリーム色になっていくグラデーションのワンピースに茶色のロングブーツ。白っぽい黄緑のカーディガン。
白いマフラーに手袋。緑の日本刀×２。

水美（ミナミ）　ラグラージ　♀　１５歳　１５６ｃｍ
ソウカの保護者。聖職者の家に生まれたので聖書等を持ちあるいている。
そでに原型の腕の模様がある水色の着物。
ショートカットにオレンジのヘアピンを前髪にとめている。
将来の夢はシスター。

はじまりがあれば、おわりがある

永久機関　午前三時　機関長室

「では、仰せのままに」

恭しくコウヤは親方に一礼。

「ボクも行きたいけどねぇ・・・・・・放っておけないからね。たのむよ」

桜花がいたずらっぽく笑い、何やら意味深につぶやく。

「願わくば、犠牲なき勝利を我が手に」

狂おしくも独善的なセリフのあと、グラスに残った赤ワインをあおる。

「イエス、ユアマジェスティ」

静かに告げてから退室するコウヤ。

桜花は退室を見届けてからジュースの残ったグラスを傾け、いっきに飲み干す。

「・・・・・ほんとはワインが飲みたかったな」

「ダ～メ。子供でしょ？」

「あははは！冗談だよ」

「本心のくせに」

「まぁね。上戸だから酔わないけど、飲むと怒るからね」

「今度、こっそり晩酌する？ボクときぃちゃんと桜花の三人で」

「いいね。いつがいい？」

「月見酒はどう？良いお酒もちよってさ」

「おもしろそうじゃん。・・・・・・で、そろそろ本題にはいろうか」

「うん。まずは、ノワール団ボスの素性について・・・・・・」

注釈

きぃちゃん・・・・・永久機関トップのアイリスの嫁。２５歳。怒るととても怖い。ピカチュウ人型。

本名黄菜（きいな）

未成年は飲酒禁止です

「くすくす・・・・・なるほど。あーっははは！おもしろいね！」

桜花が魔女と謳われるに相応しい高笑いをしておもしろがる。

「まさかこんなことになるとはねぇ～・・・・・過去を知ってると笑えてくるよ」

親方が苦笑の果てに諦観してか乾いた笑みの後、ワインをつぐ。

やがて、親方が酔いが回りはじめたのか微睡む。

「・・・・やっぱりハッピーエンドがいいよね」

「うん」

「でも、犠牲は必ずどこかに存在する」

「でもぉ～・・・・・・」

「わかってるよ」

「・・・・・・・すぴー」

いつのまにか寝てしまったアイリスに桜花はそっと毛布をかけた。

「おやすみ。・・・・・せめて今は良き夢を」

喜劇を観測者が怪しくも黒い笑みをこぼし、嘲笑う。

出演者は演じているそれを悲劇と思うか喜劇と思うか、今はまだわ

からない。

風の中を馬車ははしる。

氷雨は前方の様子をうかがうために、顔を出す。

「ミユ、まだか」

「もうちょっと！気を抜くと落ちるよ！」

「おー怖。じゃ、ちょっくら寝かせてもらうぜ」

「あいよ」

帰る為の旅路は続く。

純粋に待ち続ける待ち人。約束した旅人。今はまだ果て遠き道を行くしかない。

永久機関　桜花の部屋

何も考えずにベッドにねころがる。

「今はどうしてるかな・・・・・にしても、不審な点が多い。何をしたいのだろうか」

サイドテーブルにあったはずのものを捜し、苦笑する。

「とられちゃったよ・・・・・・飲みたかったのに」

仰向けになりサーシャの言葉を思い出す。

「たしか子供だからとか、飲み過ぎだとか怒ってたな。ボクは平気なのに。そこがサーシャらしい・・・・」

おもむろに起き上がり、ベッドの下をのぞく。

「あちゃ～。ばれてたか・・・・・けっこう高い買い物だったのに」

重厚な作りのアンティークのクローゼットを勢い良く開けた。

クローゼットのしたの引き出しから藍色のローヒールをとりだしはく。

そのなかから蒼いふわふわでゆったりとしたドレスをひっぱりだす。

着てからしわをのばし、破れやほつれがないかチェック。

ないとみてからサファイアのバラのイヤリングをつけ、

最後にはうなじで一つにまとめた髪を右側から前に持っていきたらす。

そして、鎖骨のあたりに一際目を引く掌サイズの金細工の蝶をつけて部屋をとびだした。

部屋の前で待っていたサーシャに元気にあいさつ。

「おはよう、サーシャ！」

「ふふふ、げんきですね。おはようございます」

永久機関　夜明け前

「♪～らーらー」

屋根に上り、上機嫌で歌う桜花。

蒼いドレスの裾が風にはためく。

太古の昔に歌姫（ディーヴァ）と称された旅人がいた。

彼女は世界各地を渡り歩き、後の世の為に旅行記を記した。

ある人が桜花が伝説の歌姫のようだと賞賛した。

それから、竜の歌姫の異名がつくこととなった。

「さすがですね。歌姫さま」

「ちゃかさないでよ。・・・・・はずかしいし」

「いいじゃないですか」

サーシャがそっととなりにすわる。

「もうすぐ、夜明けだ」

「そうですね」

「・・・・・風が変わった。動くよ」

「わかりました。ボスに伝えておきます」

永久機関　機関長室　夜明け直前

「動くね。なにもかもが」

「ふぅん。・・・・・楽しみだねぇ～どうかわることやら」

「風は変化の象徴ですから。でているということは変わります」

「変わらざるおえないんだよ」

「だれであろうと
「なにであろうと」
「どう変わるかわからないけどね」
サーシャが報告に行くのにきまぐれでついていった桜花。
親方が悠然とした態度でふたりをむかえた。
「いつ？」
「ボクの予感ではもうすぐ」
「思ったよりもはやい到着予定ですわね」
「どうだろうね」
まもなく夜は明けることだろう

永久機関　地下のとある一室

部屋の中央にグランドピアノがおいてあるだけの部屋に桜花は足を

運んだ。

ピアノの音程に狂いはないかをしらべて「トルコ行進曲」をひく。

一般的なトルコ行進曲よりもはやく、手の動きもはげしい。

演奏中であるが、ささいな不審音を聞き逃しはしなかった。

「だれ？」

すぐさま、演奏をとりやめ問いかける。

「そんなに恐い顔しないでくださいよ」

「サーシャか・・・・・おどろかさないでよ」

「おたがいさまですよ」

「そうかもね」

上の階がにわかにさわがしくなる。

「来たね」

「いきましょうか」

「ああ」

ふたりはピアノの部屋を後にした。

親方はふたりが去って部屋が静けさをとりもどしたころにはいった。

えんじ色の図鑑ほどの大きさのケースをイスにおいて、開ける。

一体のマリオネットがキレイに収納されていた。

ていねいにとりだし、地に足をつけて自身はイスにケースをずらしてすわった。

マリオネットにかわいらしくおじぎをさせて踊らせる。

「変わったねぇ・・・・・なにもかも。あのままだったら今のボクはないかもしれない」

また、おじぎをさせて踊りを終わらせる。

「さぁ、行こうか。新しい時代へ。政府も動きだしたし」

部屋にはマリオネットがとりのこされた。

「おかえり！」

「おかえりなさいませ」

「おかえりぃ～」

「ただいま」

「だれだこいつら？」

「ただいま。じつはすごいもの拾ってきちゃいました」

口々に近況報告する。

ミツキが氷雨に親方達を紹介し、氷雨はそっけなくあいさつ。

幸夜が拾い物といってかかえていた赤と青のオッドアイのピカチュウを親方に渡す。

「話があるので別室に・・・・・」

「わかった」

アイリスの表情が可愛らしい笑顔から真剣なものにかわり、ドアを勢いよくあけた。

が、足の指をドアにぶつけて転がり回る。

「～～～～っ！」

声にならないさけびをあげるが周囲にはシュールな光景としかとられなかった。

「ぷっ、あはははは！」

つぼだったようで桜花の笑いがとまらなかった。

はじまりがあれば、おわりがある（後書き）

心さん　キャラ提供
名前：ボルテック＝レインボー（通称、ボルト）
年齢：１５歳
性別：雄
種族：ピカチュウ　人型にも原型にもなれる。
所属
無所属から永久機関
理由
永久機関に興味を示したから。
性格：基本的に優しく冷静。敵には残酷になる。
服装（容姿）：
共通→目が透き通った赤と青のオッドアイ
原型→普通より少し大型で背中に翼が生えている。
人型→金髪、上は緑のトレーナーで長袖の黄色のロングコート、下は青の長ズボン。
セリフサンプル：
特に無いです。
一人称は僕。標準語で口調は荒っぽくなったり優しくなったりと色々！
その他：
全ての能力が他のポケモンに比べ３、４倍以上高い。
また、全ての技が使える。
バトルで本気を出すことは少ない。
駄目な場合は使わなくて結構です！

作者より、都合上使えなくてごめんなさい

最終話　終幕と同時に開幕の鐘の音が舞台に響いた。（前書き）

これで、終わりです。いままでありがとうございました。

最終話　終幕と同時に開幕の鐘の音が舞台に響いた。

１２月中旬　某山の墓所にて

「・・・・・・今から、十年に及ぶ戦禍の一部始終を包み隠さず、報告します。

全ては十年前、クロハお兄様のおこしたことからはじまりました」

十年前、地方貴族に生まれた先妻の子、クロハと後妻の子サーシャルベル。

確執もとくになく、友達にも恵まれ穏やかで優しくあたたかな世界の中にいた。

そう、墓前で報告している彼女が五歳の誕生日の夜までは・・・・・

その夜、彼女は異常な熱さと火の爆ぜる音で目を覚ました。

兄に抱えられ、燃え盛る屋敷から出たぐらいしか憶えておらず、

知人や友人を尋ね歩くも首を横に振るばかり。

それから、兄の友達でもう一人の兄のようなアイリスががむしゃらに働き、それについていった。

兄の目的が判明すると、それを阻止する為に戦争となった。

政府にも軍隊は存在するも、戦力は皆無。自ずと、頼れるのは機関のみとなった。

争いながらも、理由を再度問いただす。

その理由は愚かしくも、幻想的な神になるというものであった。

満身創痍で辛くも倒したが、いずこかへ姿を消した。

あえて深追いはせず復興を急いだ。

翌日、ミツキを捜しにきた育ての親たちが迎えにきた。

そのメンバーは、年齢不詳の見た目十代の古風なユキメノコ、

優男のムクホーク、非熱血系のゴウカザル、

おしとやかなお嬢様系ロズレイド、むじゃきなボーマンダ、ツンデレ少女のネオラント、

けなげな薄幸少女のデンリュウの、ヘタレ男のレントラー、のうてんきな元気娘のフローゼル、

こわがりな女の子のフワライド、超絶美女のミロカロス。

不定期だが遊びにくると手紙で書いて送ってきて、喜ばせた。

「・・・・・・これぐらいでしょうか？思い起こせば、様々なことが・・・・・・」

そのとき、彼女にとって見覚えのあるひとがやってきた。

かくて世界は巡る。

耳を澄ませば、新たな舞台の幕開けの鐘の音がする。

いまはただ、完結の余韻に酔いしれていても赦されるだろう。

「終わりない歴史と繰り返される過ち」　完結

いずれまた、次に過ちは繰り返され、歴史は続いていく。

観測者はまた笑った。

最終話　終幕と同時に開幕の鐘の音が舞台に響いた。（後書き）

いままでありがとうございました。

いままでありがとうございました。

この作品は、ぱっと浮かんだシーンを形に残したくて、生まれたお話です。

以前からポケモン擬人化モノが書きたくて仕方がなくて勢いで書き始めました。

あの頃も今も書くことが楽しくて、他人の評価なんてどうでもよくて、ただ己の欲求を満たす

ために綴っていました。

ただ、この作品の惜しむらくは、オチが完璧にできていなかったことです。

もうちょっといいオチができたら書き直します。

それでは、またいずれ出逢うことができたら。

２０１１　２　２９　水上羚（みなかみれい）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2865n/

終わりなき歴史と繰り返される過ち。

2011年9月15日11時45分発行